

川御門のうち東北の方へ堀まはし、その中を廣くし、屋舗の割を命せらるべきよし、初は吉祥寺の後より本郷の臺をほり通すべきむね評議ありしが、後におもむきかはりて、吉祥寺の前を堀わり、田安御門の北東の方に引ならし、神田神社、其外萬隨寺等を外へうつせり、明神は神田のだい萬隨寺は下谷と定られ、本明寺其外は小石川などへうつし、かの御堀の土をもて築き立屋敷がまへなりしと云、この頃御曲輪内の大名旗本の屋舗は、ほゞ定りしなるべし、又商家などもいにしへよりありて、ことに今の日本橋のあたりは、諸國のあき人等つどふ所にて賑ひしと見へたり、蕭菴の靜勝軒の詩の序ニ云、城之東畔有河、其流曲折而南入海、商旅大小之風帆、漁獵來去之夜篝、隱見出沒於竹樹烟雲之際、到高橋下繫纜閣權、鱗集蛾合日々成市、則房之米、常之茶、信之銅、越之竹、箭、相之旗、旄、騎卒、泉之珠、犀、異香、至鹽、魚、漆、桌、扨、筋、膠、藥、餌之衆、無不彙聚區別者、人所賴也、又萬里和尚の詩の序ニ云、宜哉、公以靜勝稱軒矣、倉廩紅陳之富、栽粟而雜皂莢、市鄣交易之樂、設市門前擔薪而換柳絮、僉曰一都會也、これ長祿文明の頃にして、太田道灌江戸の城にありし時なり、此頃商家もありしとみゆれど、今とはさまことなりしなるべし、或書に云、江戸町屋のはじまりは、今の日本橋より道三河岸の堅堀をほられしを初にて、それより次第に堅堀横堀などいでき、其揚たる土を堀の端に山のごとく積あげてありしを、諸國より集りし町人こひ奉りしかば、町家にわりて給はりしにより、おのがまゝに揚土を引とり、地面を築き、かまひを定め、表の方へは、松蔭なども垣とし、其後次第に家居をたて、引うつりしが、初の内は町家を願ひしものも少なりしに、伊勢國よりあまた來りてこひしかば、ほどなく町屋多く出來て、一町のうちなかば、伊勢屋をもて稱とせしと、按に、かく町屋の建し年歴を詳にせず、されども慶長十四年正月四日、江戸本町五町ほど、又石川玄蕃頭屋舗も焼夫せしと、慶長記にのす、是によれば、本町などは初載る所より前に立しと見ゆ、或書ニ、日本橋より道三河岸の堀をほりしと云、慶長十六年より後の事